

## 五十九年の誤り（三）

土田龍太郎

おのが身のなにくれのことにつけて是非善惡を定めむとほりするは人の性なりといひつべけれど、まことはこの是非善惡しかとは究めがたし。初め善かりしこといつしか悪しきに變り、昨日までは是と思ひなしたれども今日はひきたがへてきながら非と見ゆること少からず。かかることのうち累りぬればいかにもせむすべ知らず、ただおぼつかなきままに酔ひ惑へるがごとくいたづらに過す月日そのすゑにただむなく老い朽ちぬるぞ世に住む人のおほかたの定めなるべき。

蘧伯玉はや齡六十に及びて去にし五十九年を省みしに、おのが年々になせしあれこれさながら誤りなりけるをゆくりなく思ひ知りてうち驚かれぬれども、今さらに悔ゆるともかひあらばこそ、すべなきままに嘆き迷ふほかなりけむさま思ひしのぶにたへたり。蘧伯玉のよるべもなき老いのはて、甲の行文いこと短かなれども、ただ一わたり辿るほどは、げにさぞありもやしけむとおぼゆるむかし。さはれ一節の語句さらに詳しく推し測りもてゆかむに、ここにて筆者、賢者の名に立てりし蘧瑗のいまはのきはをわざと拙きかたに説きなして憫み嘲わらはむの下心ありとせばなかなか諾うべなひがたからまし。

甲乙いづれにても六十而化の一句あれど、よくよく心とめであるべからざるはこの化の一字にほかなきなり。成玄英の疏にて昭達空理と云へるは佛家の説に寄せて化字を解きしなるべし。すでに一期のはてに至りなむとせしときの蘧瑗の心の内まことはいかなりけむ、つばらに明らめむすべとはなけれど、世のもろ人の入りがてにするなにとやらむ神妙の境界に至りけむと思ひはかるにたへたり。

莊子則陽篇の中すでに引ける甲に續けるところに

可不謂大疑乎

の一句あり。郭象この句につきて註解せること左の如し。

我所不知物有知之者矣、故有物之

知則無所不知、獨任我知、知甚寡矣

ここにて郭子玄、物には物の知といふものそなはりたれども、これ人の知と同じからねば、人の知のみに任せて物の知をえ用ゐざるかぎりは誤つことなくてありなむやはと論あげつらへるにたり。

人のみならず物にも知そなはりたりとはふつに信うけがたければ、もはら語句の面おもてばかりうち見るほどは、右に引きし郭象の註記ただもてあつかひてやみなむほかなし。

ありとあるもの、けぢめなくついでもなく、ただしどろに亂れゆくばかりにてはさらにあるまじくて、その移り變りのさまざまことは法のりもしは掟しだのときものに順したがへるにてぞあるべき。この法と掟しだいともかすかにはるかなれば、なべての世の論ひのみにてはいかにとも捉へがたし。物にも知ありとはさすがまことしからねども、なべての人の知の埒はのほかなる物の法を、しばらく人の知にむかへて、かりそめに物の知と呼びたりとせば、郭象の註記なかなかよしありげにおぼゆれば、なほざりには見すぐすまじきなり。

郭象のいはゆる物の知をさらに考へもてゆけば、萬の物を貫すき統すぶるただ一すぢの大いなる道のごときものに思ひ及ばではあるべからず。この道といふはいともはるけくまたかすかなれば、これなむそれとてまさかに指し示すまじく、おぼろげのさかしら心もてはさらに悟りがたし。いとまたへなる深き物の理ことわりなべてのもの目の目には隠れて顯れねば、道なきがごとくにも見ゆめれどもまことは道なきにてはあらず。道の道とすべきは常の道にあらずと老子の説ける道、げにかかるまことの道にほかなかるべし。

ありきたれる是非善惡になづみ、われとわがさかしらに心たらひて去にし日のおのが誤りいささかも知らでやみなむ世のおほかたの生き死にのはて、むなしはかなしといふもおろかなり。これにはことかはりて、わが命のつひのきはにてもあれ、ともかくもみづからの誤りを悟りつつ道の奥をかいまみしは蘧伯玉のいさをなりといはでやはあるべき。

甲の筆者、かつは賢大夫の智慮省察のならびなかりしを褒め、かつは事理輕變のいとも  
悟りがたきをほの示さむとてこの一節をものせしなるべし。

(令和三年十月十八日受附)